

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第478号 平成25年1月23日

## 八甲田山（2）

厳冬期に八甲田山を踏破するのは、今日の近代的な装備をもってしても非常に困難だといわれています。まして、当時は防寒に対する知識が不十分で、しかも小倉服（厚地の夏服）、軍手、短脚型の軍靴といった、防寒機能としては誠に粗末な装備で雪深い山中を踏破するというのは、無謀としかいいようがありません。

勿論、当時においても厳冬期の雪中行軍が相当の困難を伴う冒険だという認識はあったようです。それなら、なぜそんな危険を冒して八甲田山雪中行軍を実施することになったのでしょうか。

それには、当時の日本が置かれていた国際的な環境を見て置く必要があります。

日本は明治維新後、殖産興業・富国強兵に取り組み、欧米列強に伍した独立国家として近代化への道を歩み始めますが、その日本にとって、南下政策を推し進める強国ロシアは非常な脅威となっていました。

明治27年7月日清戦争が勃発します。この戦争では、軍の近代化を推し進めてきた日本が清国を圧倒し、翌28年4月下関条約が締結され講和が成立します。その際、日本は、事実上朝鮮半島の支配権を獲得すると共に、遼東半島や台湾などの割譲を受けます。

日本国民は、戦勝気分酔いしれていた事と思いますが、これに冷や水を浴びせる事態が起こります。ロシアはフランス、ドイツを誘い、遼東半島を中国に返還するよう日本に要求を突き付けたのです。結局日本は、圧倒的なロシアの圧力に屈して遼東半島を中国に返還することになりますが、これを世に「三国干渉」といいます。

これに対して、当時の日本人は切齒扼腕するのですが、力の差は如何ともし難く、国民の間に「臥薪嘗胆」という言葉が流布したのもこの頃の事です。

一方のロシアは、その後も南下政策を推し進め、明治31年には日本が中国に帰した遼東半島の旅順・大連港を中国から租借してしまいます。

こうして、日露間の緊張が日増しに集る中、誰しも、いずれ日露は戦わざるを得ないと考えるようになります。

もし日露が戦う事になれば、酷寒の大陸が戦場となる可能性が大ですが、日清戦争で日本軍は、酷寒の中で多数の死傷者を出した苦い経験を持っていました。この

為陸軍では、対露戦に向けて耐寒対策、耐寒訓練が急務となっていたのです。

更に、仮にロシアが日本本土を攻めると想定した場合、ロシア艦隊は陸奥湾を封鎖し、防御の弱い青森や八戸を狙ってくる事が考えられ、弘前に本部がある第8師団としては、青森－弘前間などの主要道路が断たれた場合を想定して、八甲田山を迂回した青森－八戸、青森－弘前、弘前－八戸を結ぶ冬のルートの開発が急がれていました。

八甲田山雪中行軍は、そうした切迫した状況の中で実施される事になったのです。

ここで、青森隊と弘前隊それぞれの雪中行軍に向けた取り組みについて見てみます。

項目	青森隊	弘前隊
計画準備	出発4日前	一月前
隊長	神成大尉 上司の山口少佐が同行	福島大尉
規模	各中隊から人選した寄せ集め部隊で 200名という中隊規模	志願者37名の少数精鋭部隊
食料	3日分の食料などを14台のそりに乗せて運ぶ	予め、行程の途中で賄えるよう手配
情報収集	殆どなされず	きこりやマタギなどから冬山に関する情報を収集
事前訓練	行軍5日前の晴天下に一回実施	2年前から数次にわたり訓練実施
案内人	確保せず	難所での案内人を雇う

(この表は、山下康博著「指揮官の決断」を基に整理したものです。)

青森隊が遭難したのは、想像を絶する悪天候であった事は間違いありませんが、この表を見ても分かるように、青森隊は弘前隊と比較すると明らかに準備不足の感否めません。

そして、青森隊が抱えている問題は、準備不足ではなかったのです。

まず、組織構成について見ますと、弘前隊が意識の高い見習い士官などを中心とする少数精鋭であったのに対して、青森隊は各中隊から推薦のあった兵士を中心とする寄せ集め部隊で、しかも200名を超える大規模な編成となっています。

また、行軍隊の指揮官は共に中隊長を勤める福島・神成両大尉でしたが、青森隊は、行軍隊に「臨時移動大隊本部」が同行し、その指揮官は神成大尉の上司である山口少佐でした。これでは、神成大尉もやり難かっただろうなと思います。実際、行軍途中で、山口少佐が指揮を執るなど指揮権の乱れが生じ、これも被害を大きくした要因と思われます。

事前の訓練も、弘前隊は2年前から訓練を重ね、準備を進めて来ましたが、一方の青森隊は、出発の5日前、晴天下での日帰り訓練を1回実施しただけでした。

しかし、何といたっても青森隊にとって致命的だったのは、案内人を用意しなかった事でしょう。もしも事前に案内人を用意していれば、結果論ではありますが、あ

れ程の被害を出さずに済んだかも知れません。

なお、八甲田山雪中行軍の実施時期については、一度山口少佐が連隊長に対して、厳冬期の1月ではなく3月の彼岸過ぎにしてはどうか意見具申しています。しかし、連隊長に「1月の大寒だからこそ意義がある」と一蹴されてしまいます（山下康博著「指揮官の決断」から）。

1月も3月も大して変わらないという思い込みは、雪や寒さに対する無知としかいいようがありませんが、連隊長には、弘前隊に後れを取りたくないという強い対抗意識があらゆる判断に優先したのかも知れません。

青森隊は、組織こそ規模も大きく立派ですが、内実は計画も杜撰、訓練も準備も不足したまま、闇雲に白い悪魔に挑戦したようなものです。参加した兵士には、命がけの危険な任務という意識はなかったように思われます。

また、神成大尉は調整型の能吏で、いわば平時のリーダーといったタイプの指揮官でした。

一方の弘前隊は、八甲田山を踏破するという目的のためだけに組織されたプロジェクトチームであり、その指揮官を努めた福島大尉は、危機にあっても冷静に力を発揮する、強力なリーダーだったといわれています。

このリーダーのタイプの違いは、両行軍隊の明暗にも大きな影響を与える事になります。

かくて青森隊は、明治25年1月23日、行く手にどんな地獄が待ち受けているかも知らず、1泊2日の雪中行軍をスタートさせたのでした。（塾頭：吉田 洋一）